



2014年7月2日放送

## 印象に残る症例①

葛外科・脳神経外科クリニック 副院長 佐々木 千恵子

当院は脳神経外科医の院長と泌尿器科医である私の二人で診療を行っております。今回、私の専門である泌尿器疾患で受診された患者さんで印象に残った症例を紹介いたします。

日常の診療でよく診る泌尿器疾患の一つに、女性に多い膀胱炎があります。先生方もすでにご存じのとおり、膀胱炎は様々な要因で起こってきますが、もっとも多い原因は細菌感染によるものです。細菌性膀胱炎の治療は主に抗菌薬投与で、早い人では数回の内服で症状は軽快、消失し、数日で治癒します。

しかし、このような患者さんの中に、何度も繰り返しかかっては病院を受診される方を見かけたことがあるのではないのでしょうか。このような方に対し、短期間での頻回な抗菌薬の投与は、菌交代や菌の耐性獲得につながる懸念があり、漢方薬を用いた治療にあたる先生も多いかと思われます。

今回、頻回に膀胱炎を繰り返す患者さんで苓桂朮甘湯が著効し、膀胱炎の罹患頻度が劇的に軽減した患者さんを経験いたしましたので、紹介したいと思います。

症例は81歳、女性。体格は小柄できゃしゃな方でした。

この方は「頻回に繰り返す膀胱炎」を主訴に近医より、X年6月、紹介受診されました。症状の出現は、X-1年の7月でその後2~3か月おきに、X年になってからは、1月、3月、

4月、6月と頻回に膀胱炎に罹患するようになってきておりました。前医ではその都度抗菌薬投与をうけ、その後は膀胱炎症状に応じて早期に内服するよう猪苓湯の投与を受けておりました。一時的に症状はおちつくものの、あまりに頻回に繰り返すことから精査目的での紹介でした。

初診時の検尿はタンパク、糖、潜血ともに陰性、沈渣では赤血球 1~3/每視野、白血球が4~6/每視野でした。前医にてすでに抗菌薬、猪苓湯が投与されており、受診時には症状は軽減している状態でした。腹部エコーでは、両側腎、膀胱には異常所見は見られず。また、残尿もありませんでした。普段の排尿回数は7~8回、夜間排尿回数は1回起きるか起きないかとのこと。尿細胞診は前医にてClass IIでした。

検査にて膀胱炎を繰り返す明らかな原因が見られないことから、私生活についてお話を伺っていくことにしました。

X-3年前に娘さんをなくし、その後すぐに息子さん夫婦と同居するようになったとのことでした。お話を伺っていると、息子さん夫婦に気を使うためか、かなりストレスがかかっている印象が見受けられました。また、めまい、ふらつきが日常生活で頻回にみられ、回転性の強いめまいを起こすこともたびたびあり、ベタヒスチンメシル酸塩が頓服処方されておりました。それでも落ち着かないときは近医で点滴を受けていたそうです。

患者さんの舌をみると、薄い白苔がみられ、舌質は淡紅色でした。腹診では、腹力 2/5、軽度腹直筋の緊張がみられました。脈は沈でした。

初診時、膀胱炎の症状が落ち着いていたため、めまいの症状に注目し、苓桂朮甘湯 7.5g を分3で処方いたしました。2週目の受診では、患者さんは「ぐるぐるするめまいは、苓桂朮甘湯を内服してから落ち着くようになりました」とお話しされました。さらに「この漢方薬を内服してから尿量も多くなりました」と喜ばれました。そこで、苓桂朮甘湯を継続して内服していただくことにいたしました。

しかし、8月になると膀胱炎症状が出現し、近医受診。猪苓湯を処方してもらった、とのことでした。当院受診時にはすでに検尿では異常はみられませんでした。さらにお話を詳しく聞くと、膀胱炎になる前に強いめまいが見られたとのこと。そして、今回に限らず、強いめまいが起こった後に膀胱炎にかかりやすいことがわかりました。検尿では異常所見はみられないものの、膀胱炎様症状は継続して見られるとのことから、苓桂朮甘湯を 5.0g 分2に、猪苓湯 7.5g 分3を追加して服用していただくことといたしました。

9月中旬には膀胱の違和感がない日が継続し、10月には猪苓湯を頓服に切り替え、苓桂朮甘湯のみ定期的として内服継続することといたしました。この時にはめまいも軽減し、ベタヒスチンメシル酸塩の内服回数も減少しておりました。

X+4年たつ現在では、患者さんの希望により、苓桂朮甘湯 7.5g 分3で投与。日常生活においてめまいはほとんどない状態で、快適に過ごされています。また、猪苓湯は月に数回違和感があるときに内服されるだけで、抗菌薬を飲むほどの膀胱炎は2回にとどまっています。

苓桂朮甘湯の構成生薬は茯苓、朮、桂枝、甘草の4味から成り立っています。本方意は気の上衝に伴って元来存在する心下部の水毒が上行動揺して立ちくらみ、めまい、頭痛、のぼせ、心悸亢進などを起こしている状態です。桂枝、甘草の組み合わせは気の上衝を引き下げ、茯苓、朮の組み合わせは、上行動揺している心下の水毒を利尿へ導き動揺を抑える働きをしています。

苓桂朮甘湯の出典は、傷寒論ですが「心下逆満し、気、胸に上衝し、起き則ち頭眩し、脈沈緊、身、振振として動揺する」とあります。

出典にありますように、今回の症例では、娘さんがなくなり、息子さんご夫婦と同居、というストレスから気の上衝が起こり、めまいが出現してきたものと考えられました。膀胱炎は強いめまいを引き起こした後にたびたび見られていたことから、病態の本体は気の停滞により水毒が起こり、尿量が減少し、膀胱炎を惹起しやすい環境になっていたものと推測されました。気逆をなおせば膀胱炎が軽減すると考え苓桂朮甘湯を選択。結果として、めまいと膀胱炎の頻度の軽減をはかることができました。

また、この漢方薬の魅力は効果が比較的に短期間で現れやすいという点です。漢方薬は一般的に複数の生薬をあらかじめ組み合わせた方剤ですが、生薬の数が少ないほど効果の出現が早くでるといわれています。苓桂朮甘湯は構成生薬が4味と他の漢方薬に比べ少なく、実際に今回の症例においても、漢方薬を内服2週間後にはめまいの軽減、尿量の増加がみられております。

「漢方は病気をみずに人を見る」と言われていますが、今回の症例はまさにこの言葉がぴったりあてはまる症例だったと実感しております。トラブルを起こしている膀胱だけに治療を定めては、今回のような症状の改善はみられなかったでしょう。

患者さんを「一人の人間」と全体的にとらえ、全身のバランスを整えて治療ができること、これが漢方の魅力なんですね。